

DCS-W3 ドタバタ導入記

1. なれそめ

出会いというのは不思議なもので、わずか半年ばかり前のことというのに、どうして PARC Audio という名前に行き着いたのか、どうしても思い出せません。でも、最初に PARC Audio の Web を一目見たとき、その時にはたしか、すでに DCS-W3 の写真があったように思いますが、記憶違いでしょうか。その姿形の美しさに、とにかく「一目惚れ」でした。

なんとしても聴いてみたい——そうしたら、試聴貸出機があるとの有り難い仰せ。一も二もなくお願いしていました。これが 2008 年は 8 月、蒸し暑い夏の盛りのことでした。

PARC Audio から試聴機が届いた日は、あいにくの雨。濡れやしないかと気が気ではありませんでした。丁寧な梱包をそっと開いてみると、簡素な PARC Audio のロゴ、そしてさりげなく、しかし誇り高く **Made in Japan** と記したパッケージ、それをさらに慎重に開封すると……写真よりもはるかに素晴らしい DCS-W3 が姿を現しました。

「これだけの姿形をもつキカイの性能が悪かろうはずはない」——妻には内緒ですが、その時にはもう 3 分の 2 は購入を決定していました。

2. 物好きの生き立ち

私は法律屋、いわゆるロマンの類いと一番縁遠い仕事を職業としています。したがって、音楽だの音響だのといった分野は畑違いもいいたところですが、「下手の横好き」とやらで、こういった方面にやたらと好奇心が強いままに今日に至ります。だいぶ散財してもきましたし、ずいぶん寄り道・回り道をしてきました。実際、「その好奇心を本業に活かせば、もっともっと素晴らしい仕事ができそうなものを」と、誉められたのか咎められたのかよくわからない御言葉を頂戴したこともしばしば。

でも、散財を反省はしても、寄り道・回り道を後悔してはいません。幸い、本業の合間に生ずるあれこれの仕事にも結構役に立ってきました。だから、自分では「法律屋はたかだか 20 年、だけどこっちの仕事は 30 年以上」などと威張っています。何よりも、自分のひそやかな世界を持ち、それをある程度家族と共有できているのが幸せ、と思っています。

でなければ、いくら「一目惚れ」しても、DCS-W3 を購うことはかなわなかったでしょう。

3. 私の環境

前置きはこれくらいにして、具体的にリスニング環境を略記しておきます。

*部屋： 3.6m×4.8m×2.7m (天井高)・石膏ボード上に壁紙仕上げ、フローリング貼りの 2 階洋室、左サイドが掃き出し窓 (二重サッシ・二重カーテン)、右サイドにクローゼットと出入口……ごく普通の部屋です。問題は仕事柄、書類の山に囲まれている、ということ。書棚に立てて壁際に置いてある分には遮音・吸音にも一役買ってくれるのですが、気がつくと寝床の周りまで書類の山、という事態もしばしば……これが面倒なところですよ。

*アンプ： LUXMAN LX-360・プリメインアンプ：ご存じの通り、真空管式です。LUXMAN の真空管アンプも音作りにはだいぶ揺れがあり、最上位の真空管パワーアンプ・MA-88 ほどではありませんが、このアンプもかなりハイ・スピードな音を出す、という印象を以前から持っていました。ちなみに DCS-W3 導入前は、Celestion SL-6S をつないでいました (今は居間で活躍中です)。いずれにしても、がっちりしたアンプであることには違いありません。

*音源： これはもういろいろで、アナログ・ディスクあり、CD あり、カセットあり、最近では PC にロスレス圧縮でファイルとして保存した音源を ONKYO SE-U55GX 経由で鳴らすことがふえました。いろいろ議論のあるところとは思いますが、オートマティックで自由にプログラムを編成できる音楽の楽しみはなかなか代え難いところがあります。

音楽を聴くうえでは、それほどの「駄耳」と思っていないんですが、人並み外れた耳を持っているわけではありません。そんな人間のレポートということをおことわりしておきますが、何らかの御参考にさせていただければ幸いです。

4. 第一次セッティング

漆黒のピアノ塗装に手垢などつけてはいけない、と手袋をはめてセッティング開始です。

まずは基本の「き」。SL-6S を載せていた TAOC のスピーカースタンドに置きました。SL-6S も小振りなスピーカーですが、その半分以下の大きさにびっくり。本当に小さい。ただ、このとき、後で代表からアドバイスを受けることになる誤算をしていました。

というのは、SL-6S はブックシェルフ型ということで底面にはインシュレータもスパイクもなし。そして、TAOC のスピーカースタンドは、たとえば、上面は焼き付け塗装の鉄板でツルツル、足はスパイクとスパイク受けからできています。また、住宅が軽量鉄骨ユニット構造ということで、SL-6S だと階下に震動として伝わるため、耐震用滑り止めとして販売されているエラストマ・ジェルを滑り止め&防振材として使用していました。

それで、大切な試聴機を滑落させてはならない、ということでそのままエラストマの上に設置したのでした。

設置位置は、左右それぞれのサイドからスピーカー中心軸で約 40cm 弱、背後の壁から前面で約 40cm 弱離し、部屋を長手方向に使用したときに二つのスピーカーのセンターが概ね部屋の中心軸に揃うように設置して、私はその中心から約 2.5m 程度離れた場所を定位置としました。もっとも、これは自分の仕事場の定位置がここしかない、ということで決まってしまうことで、音響最優先で「決めた」というわけではないのが正直な話です。

その中間には 32 型の液晶 TV が鎮座していますが、これはスピーカーの設置に関係しないでしょう。本音を言えば、もっと大きなスクリーンで「ホームシアター」としゃれ込みたいところですが、スペース的にちょっと厳しいですね。

さて、ここで機器をつなぐケーブルについて一言申し上げておきます。

アンプを買ったショップに出かけると、本当に百花繚乱、いろいろな効能を謳ったケーブルが置いてありますが、目の玉の飛び出すような値段がついていて、とうてい手の出るものではありません。一方、ホームセンターに出かけると、これまたびっくりするような安い値段で似たような姿形のケーブルが置いてあります。

結局のところ、私はどちらにも手を出していません。一方は値段と効能がどうも釣り合わないし、肝心の効能とその科学的根拠に「？」がたくさんつくからです。おそらく皆様ご存じの「オーディオの科学 (<http://www.ne.jp/asahi/shiga/home/MyRoom/Audio.htm>)」では、これらの「効能」を徹底的にやっつけたうえで「1000 円/1m のスターカッド・ケーブルで十分」とおっしゃっていますが、私にはこれでも高すぎる、と感じるくらいです。片やもう一方のケーブルは、特にコネクタ部分に弱さを感じていて、そこあたりがぐらぐらしていると訳のわからないノイズに悩まされることを経験的に知っていますので、これまた手を出さないことにしています。

したがって、私は原則として、ごく普通の電気屋さんに置いてある、名の通ったメーカーの上級グレードのケーブルに限って使用しています。普通グレードでもいいのですが、そこは「信頼性」にコストを払おう、というわけです。ただ例外は、アナログプレーヤーの引き出しとデジタル同軸ケーブル、そしてスピーカー・ケーブルです。

アナログプレーヤーの引き出しは微少出力だけに注意しておこう、ということ、デジタル同軸ケーブルはジッタの影響を避けておこう、という「お守り」です。それで、スピーカー・ケーブルは、というと、これまたごく普通の電気屋さんに置いてある「ぶら下がり品」の上級グレードのケーブル（これでも 100 円/1m くらいでしょう。「オーディオの科学」の御主人にはとても及びません）を自分で加工したものを使っています。

つまり、2本1組のセットを2組買ってきて、2本のケーブルをシュリンクタイで適宜縛りながら縊りあわせて（ツイストして）両端にバナナプラグをつけています。これに少し暇と予算があったら、オヤイ

デあたりで売っているシールドと被覆をかぶせて見てくれを良くしようとも思っていますが、今のところ優先順位はかなり下です。

ほんとは長岡鉄男氏ご推薦のキャブタイヤでもいいのですが、少々見てくれがよくありません。それに縫りあわせの音声ケーブルは仕事場でちょっとした「事件」があり、おそらくは外来と思われるものの訳のわからないノイズに悩まされたとき、さる測定現場で使用していたという汎用のツイスト・ペア・フラットケーブル（本当の名前は忘れまして：ちょうど、SCSI160 で使われていたケーブルに似ている、といえ一番正確でしょうか）でピタリと収まったこと、それをフレミングの左手の法則でわかりやすく説明してもらったことで、一般住宅でもインバータがあちらこちらに隠れていたり、デジタル信号が飛び交ったりという環境にあることから、値段的に少々高い分と手間のかかる分は「コスト」として払っておこう、というわけで使っています。

反発をおそれずにあえて大胆に言えば、「接続ケーブルで音がごろごろ変わるようなら、使っている機器の安定性にそもそも問題があるのでは？」と言いたいところですが、これはあくまでも主観の問題ですから、言い張るつもりはありません。

少し寄り道が過ぎました。こういう環境を引き継いで、さあ試聴です。

5. 感動の試聴

真空管が温まり（夏だったので、ちょっと辛かったです）、少しどきどきしながら音出しの時を迎えました。

最初に何を聴いたのか、これまた思い出せません。よほど興奮していたと見えます。

しかし、その印象は鮮烈でした。「やっぱり姿形は音を裏切らなかつたし、音も姿形を裏切らなかつた」。

「代表のブログ」で PARC Audio の主が SONY 出身の方だということは存じ上げていました。そして、私は長らく SONY 党「でした」（今でも気になる製品はたくさんあり、こうして書いているパソコンも VAIO ですが……ここから先はやめておきます）。それに、いろいろな調整をするときの基準にしているヘッドフォンは、これまた皆様よくご存じの MDR-CD900ST です。

一聴して SONY の美点、「余計な色づけをせず中庸でクセがない」ことを感じました。おそらく SONY 製品についてあれこれ言われる点の一つは、このことに対する評価の別れがあるのではないかと私は考えています。実際、「あれ？」という SONY 製品の音は「味も素っ気もなく面白みもない」ことが多かったことを経験しており、「余計な色づけをせず中庸でクセがない」こととは紙一重の差なのだろう、と感じていました。

もちろん、「そういうオマエはラックストーン信者じゃあないか」というご意見もあろうと思います。しかし、前述のとおり、私はこのアンプをむしろハイ・スピードで透明感の高いアンプと感じており、それだけに手放せなくなってしまっているのです。

また、Celestion との組み合わせならば、「少し暗めで奥まっちはいるが、芳醇で柔らかな響き」という印象をお持ちの向きがあらうかと思えます。たしかにそういう音も出ます。しかし、一方で少し渋めにはなりますが、この組み合わせ、案外とロックが得意ということはご存じでしょうか。それに、設置環境によっては、実に軽やかに歌い上げて驚いたこともありました。本当に音の世界というのは奥が深いとか面白いとか、だからやめられないとか……。

第一印象を私のメモから引用しておきます。

「さすが」というべきか、良い意味で SONY のモニターを引き継いでいると感じる。いわゆる “straight wire with gain” を「出口」で実践しているように思えるが、APM-6 monitor の試聴で感じたような「ひどい聞き疲れ」（けっして「悪い音」ではなかったが、音楽全体をすべて顕微鏡か望遠鏡で拡大して眼前に押し付けられたように感じてひどく疲れた。外に出て、街の騒音が快かったという変な記憶がある）は皆無とっていい。

明るく軽やかに聞き流すもよし、映像と合わせてシアターとして楽しむもよし、その一方、しっかりと

向き合って聞き込むモニター的な使い方もできる。さらにいえば、筐体が小さいこともとても好ましいと思う。良質の小型デジタルアンプと組み合わせると高級 PC スピーカーとして使うのもおもしろいと思う

(学生時代あこがれにあこがれた TA-E88+TA-N86 のような、いかにも SONY らしいソリッドな印象をもつアンプと組み合わせると、音もルックスもとても映えるような気がする……

そういえば、ブログで「サウンドデザイン社のデジタルアンプが似合いそう」とおっしゃっていた方がいらっしゃいましたね。

さらに試聴

貸し出しの際、「まだエージングが十分ではないので」というアドバイスを頂戴していましたので、あまり無理はさせず、最初は少々慣らし運転気味に、その後徐々に大音量でも、というふうにに試聴してみました。

その際の印象を、さらに私のメモから引用します。

興味深いのは、音量の大小と音の性格との関係である。人間の聴覚は音量が小さくなると高音・低音が聞き取りにくくなることからラウドネス・ボリュームなどというものもあるが、大音量での DCS-W3 は、それこそド迫力で明確な空間再現力をもって映画などを見せてくれる。もし完全ブラインド・テストを行えば、はるかに大型のシステムと思ひこむ人も出るだろうと思われる。フルレンジ一発の特性として、さきにも述べたように左右の定位が良好なのは当然（でもないものもあるのは事実）として、奥行き感も十分にあり、さらに難しい上下感の再現性にも優れている。したがって、目をつぶって映画を見て(?)いても、音像が三次元的に移動するのがよくわかるし、声が重なり合う場面でも「ダンゴ」にならない。

ところが、音量を絞っていくと、低音が先に絞られていく。このポイントはかなり明確である。ただこのとき、まだエージングが十分でないことが関係しているのかもしれないが、ともするとヴォーカルの「さ」行がざらつく感じになることがある。もう少し音量を絞ると、そのざらつきが取れて（現段階での）小音量のベスト・バランス・ポイントがあり、このとき高音から低音へ実に自然で心地よい響きを味わえるが、「箱庭的」という悪口はあてはまらない。もっとも、小口径フルレンジ・スピーカーはこういう用途で使うのが本来の行き方なのかもしれないが、大音量時のド迫力ぶりと空間再現力もまた特筆に値すると思う。両者がもう少し滑らかに移行すれば、文句なしに最高だと思う。

順序は後先になりますが、現在も基本的な性格はまったく同じです。もう少し正確に申しますと、アンプに火を入れて音楽をかけようというときに、最初は少しざらつく感じが今もあります。そのときは、まず人の声や木管、それにチェロなどの曲を少々音量を絞って鳴らしてやって「温めて」やります。だいたい 30 分から 1 時間もすると、徐々に「もう少し音量がほしいなあ」と感じるようになってきます。そうしたら、さて、ちょっとド迫力を楽しもうか、という頃です。こうなるともう何でも来い、わが家のホームパーティー幕開けです。

とにかくいろんな曲を手当たり次第、試聴してみました。その中で、私が試聴でよく使っている楽曲がありますので、これまた私のメモから抜き書きしてみます。

* 渡辺真知子「Fog Lamp」から「OVERTURE～今夜は踊って」「ミッドナイト」

- ・概要とポイント：1981 年のオリジナル・アルバムのトップとエンド。前者はインストルメンタルから始まって、そのまま渡辺真知子の歌唱に入る。後者は、前者をマイナーアレンジして、楽しくて仕方がないパーティーで帰りそびれて独り寂しく去っていく女心を歌って余韻を残す。ちなみに、この頃のバック・バンド・マスターは最近知ったことだが、故羽田健太郎だったそうな。道理でキーボードが立っているな、と思った。
- ・インプレッション：「OVERTURE～今夜は踊って」のインストルメンタル・パートは、最初に提示されたモチーフをさまざまな楽器とアレンジで受け渡していくあたりが聞き所だが、この曲はよく試聴に使っていた。というのは、モチーフの再現部が（楽譜には絶対にはないはずだが）良いシステムだと「歌う」のである。ダメなシステムだと絶対に「歌わない」。ところが、DCS-W3 は最初に提示した所からもう「歌い」始めている。ただし、あまり濃厚ではない。ほんのりと漂うように「歌う」。

これはこれでたいへん上品で気持ちがいい。また、羽田健太郎のピアノは立ちすぎず、むしろ控えめに全体のバランスを取っている。こういう鳴り方はあまり聞いたことがない。

ところで、「OVERTURE～今夜は踊って」は当時のことからアナログでのオーバーダビングで、ヴォーカルは後から追加したものである。なんでこんなことがわかったかということ、YL音響のオールホーン・システムで試聴させてもらったことがあるのだが、「今夜は踊って」に入ったとたん、真ん中に幅約 1m 弱のスリットが現れて、そこからヴォーカルが出てくるのがはっきりわかったからである。つまり、ヴォーカル収録のブースの幅を見事に再現したわけである。持ち主は苦笑いしていたが、これでは音楽は楽しめない。DCS-W3は、その点、そういったことはなく違和感なく再生してくれている。上記とは対照的だ。また、渡辺真知子は声域が広いけれども、頭声へ抜けるのがあまりうまくなく、どちらかという声を張り上げ気味になる。これがどうかすると下品に再生されてしまうのだが、おそらくはポスト・プロダクションで少し加工してあると思うけれども、きれいに上手に鳴っている。

この曲のインストメンタルの「歌い」方は、どういうリクツでそうなるのかよくわかりません。それに本当に皆さんが聴いて同じように感じるかも心許ないところがあります。ただ、私にはどうしてもそう聞こえるし、そんなふうに「歌う」システムはだいたい私のお好みの音を出してくれますが、「歌わない」システムは「がっかり」が多いという相関関係を感じ取っている以上、私には一種の「神様」というべき存在なのでしょう。

その一方、録音なりなんりの状況をあまりに丸出しにしてしまうのもどうかと考えさせられてしまうのが、超ハイエンドで知られる YL 音響の場合でした。

逆に、録音などのアラを上手にお化粧してくれるシステムは、心地よく音楽を楽しむのにいいでしょう。ただ、その一方、こういう事例をどう考えたらいいのか、これまた考え込むところです。

* DREAMS COME TRUE・LAT.43° N～forty-three degrees north latitude～

-strings remix version- (ベストアルバム Dreamage・Love Ballade Collectionから)

- ・概要とポイント：もともと 1989 年の曲だが、ストリングスをアレンジして 2003 年にリミックスしたもの。
- ・インプレッション：吉田美和の歌唱もなかなかだし、ストリングスのアレンジもなかなか、ところが、Celestion で聞いていてもどこか違和感が残る……と思っていたら、DCS-W3 がもろにそれを出してきた。明らかに音質が違うし、空気感が違う。これだけ違えば違和感が残るはずだ、と実感した次第。DCS-W3 のモニター・スピーカー的性格を知った一幕だった。

この曲、結構お気に入りです。時として聞き入ることも多いのですが、どこかでつきまとう違和感も否定できないのは事実で、これまた時として気になって聴くのをやめてしまうこともある、という楽曲です。「どうしてかなあ？」と思っていた胸のつかえが下りたら、それはそれで納得して聴ける——なんだかこうなると、聴いてる人間の性格の悪さが最大の問題、という気がしてきましたけれども(笑)。

その他、入手困難な音源も試してみました。

* L.v.ベートーヴェン：交響曲第 6 番へ長調「田園」(1975 年ザルツブルク音楽祭におけるカール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニーによるライブ録音を FM でエアチェック)

- ・概要とポイント：あまりにも有名な曲と演奏者だが、問題はこれも音源で、私が中学三年生の時、初めて買ってもらった SONY のステレオ・ラジカセ(ステレオ・ラジカセとしても最初の商品じゃなかったっけ?)で、当時は 1 本 1200 円もした C-120HF に録音したもの。すでに 33 年が経過してベースは完全なワカメ状態で、なんとか巻きを整えてから、前記と同じ条件で収録・加工したものである。ただ、どうも 3kHz～4kHz あたりが少し出っ張り気味で気になっている。
- ・インプレッション：いかにも巨匠という悠然とした響きがなんと言っても一番の聞き所である。やはり小音量では厳しいが、むやみに大きな音を出せばいい、というものでもない。DCS-W3 の空間再現力が聞かせどころであった。

自分で作った音源で試聴するのだから主観的なことこの上なく、再現性もゼロですが、ここでも介在しているのが前記のヘッドフォン MDR-CD900ST で、ある意味、このヘッドフォンとの比較試聴とい

えるかもしれません。しかし、そこで感じたのは「良いスピーカーで聴く良い音楽はやっぱりいいね」という当たり前のことでした。

失敗

さて、ドタバタ導入記のドタバタたるゆえんは失敗にあります。その最大の失敗は、さっきちょっと触れましたが、滑落防止のために敷いたエラストマでした。

指摘されて改めて Web を見ると、ちゃんとインシュレータの効能が謳ってあったのですが、うかつにもこれを見落としていたのです。したがって、「間にモノがはさまって、曖昧な音になりますよ」との指摘に、あわててセットし直してみました。

その効果はてきめん。もちろん、基本的な音の印象は全然変わらないのですが、音の輪郭がさらにくっきりとして目を見張る（「音を聞く」というときに、こんな表現も変ですが）ものがありました。後日談ですが、試聴貸出機をお返しした後、そのまま元の Celestion を載せて音楽を聴いていたら、階下から苦情が……「えっ」と驚いたことを覚えています。

小さな足の大きな効能といいますか、こんなところまで突き詰めてスピーカーを作っていらっしゃるのか、と頭の下がる思いがしたものです。

もう一つ、これは失敗といえるかどうかわからないのですが、試聴記にふれた「サ」行の荒れは、エージング不足や慣らし運転の不足に起因する部分も確かにありましたが、思いもかけないところにも原因が隠れていました。

自宅での試聴というのはあまり経験がなくて、あっちこちで試聴させていただいた経験から一種のシミュレーションであれこれ考えて結論を出していたものですが、その中で私の愛機・LX-360 は、いわば「神様」として固定して考えていました。ところが、ひょんなきっかけで（これも巡り合わせでしょうね）LX-360 が「サ」行の荒れに寄与する部分が割合に大きいことに気づき、前記の印象に訂正の必要を感じています。

よくよく考えてみれば、「柔らかく温かな」再生よりも「むしろハイ・スピードで透明感の高い」性格をもつアンプならば、そういったクセをもつことがあることも頭に入れておかなければならなかったわけで、これまた私の迂闊さのなせる技でした。

もっともっと試聴（もう、ほとんどビョーキです(笑)）

このときすでに私は DCS-W3 に夢中、実をいえば、20 年以上愛用していた Celestion が拗ねたのか、ちょっとおもしろくないことが 2 つばかり起きてしまったというハプニングもありましたが、これは私事に属しますのでやめにしておきましょう。

もう少し一般的な音源で試聴した際のメモです。

* [F.P.シューベルト作曲・交響曲第 9 番ハ長調 D.944「ザ・グレート」、R.ワーグナー作曲・楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第一幕への前奏曲](#)（カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー：1975 年 3 月、NHK ホールのこけら落とし公演でのライブ録音・アナログレコード）

- ・概要とポイント：あまりにも有名な演奏、最近 DVD まで出た（当時のビデオ画像と録音とをシンクロさせたものらしい）ほど今なお人気がある。何しろ、吉田秀和をはじめとして名だたる評論家たちが「どれをとっても歴史的な名演」と口を揃えるほどである。ただし、カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニーといえば、マイクが拾いにくい音を出すことで有名だったらしい。おまけにいまだに何かと音響効果の問題点を指摘される NHK ホール、そのこけら落とし公演だけに、いかに NHK 技術陣といえども収録に苦労したことと思う。
- ・インプレッション：上記のような事情から、この録音、演奏の熱気と力強さは十分捉えているが、録音そのものとしてはそれほど芳しいものではない。実際、あの広大なホールの広さが表現できていないし、何か音が固い。しかし、聞いていて「そんなことはどうでもよい」と思わせる説得力がある。

そもそもこの曲は、歌曲の作曲家として名高いシューベルトの傑作として認知されたのも戦後のことである。実際、吉田秀和が評したように「途方もない天才の作品」というしかないことが如実に伝わってくる。楽曲そのものが大編成のオーケストラを前提とした大交響曲であるだけに、ここは一つ大音量で迫力を楽しみたいところだが、DCS-W3 は十分に応えてくれた。「ニュルンベルクのマイスターズンガー」はアンコール曲であるが、これがアンコールかと思われるほどの演奏だが、これまた同じく十分に表現してくれた。

ちなみに、これはアナログレコードで再生しているが、どうしてもゴミなどに伴うノイズが出る。そのノイズの性質が「ぶつ」ではなく「ふつ」に近い。一般に「ふつ」と聞こえる方が良いとされているから、この点も指摘しておきたい。

試聴にあたっては、ホームシアター的な楽しみも味わっているだけに、映画もチェックリストに入れていました。その場合、私が重視しているのはアニメです。「え、アニメえ？」というなかれ。押井守の名著『METHODS』の表現を借りれば、実写映画は存在するものを撮影すれば成立するが、アニメは制作者が筆を執らないかぎり一齣たりとも成立しない、それゆえに最近の名作とされる作品では「音」も明瞭にそのことを認識して作られているように感じているからです。

再び、私のメモから。

* 川井憲次「Innocence O.S.T.」から「THE DOLL HOUSE 2」「傀儡謡-陽炎は黄泉に待たむと」

- ・概要とポイント：押井守「Innocence」のオリジナル・サウンド・トラックだが、音作りにはスカイウォーカー・サウンドが全面的に協力している。とはいえ、押井守と組んだときの川井憲次は「魔力」としか言いようのない曲を書く。「THE DOLL HOUSE 2」は、三協精機特注の直径 5m にも及ぶオルゴールを大谷石採掘跡の洞窟に持ち込んで録音したというし、「傀儡謡-陽炎は黄泉に待たむと」は、実に 10 分以上にわたる曲だが、そのオルゴール・パートに民謡歌手 75 人の大コーラスを 4 回オーバーダビングしたパート、さらに大小の和太鼓、シンセサイザー等々めくるめく音世界が展開する。おそるべきは、楽曲として完結しているだけでなく、劇伴としても映画とぴったり一致していること。
- ・インプレッション：これは近所の迷惑顧みず大音量で楽しむべきもので、そのおどろおどろしさをしっかり受け止めましょう（笑）。しかし、なにしろ一つ間違るとノイズの塊になりそうな音源を使いこなしているだけに、私が行った映画館での音は、はっきり言って割れていた。だから、CD が出たときにはさっそく買い込んで家で再生して「そらみる、あそこの映画館よりうちの方が絶対音がいいんだから」とうそぶいていた。この曲では「さ」行が気にならないが、録音や歌唱法なども絡んで難しいところだと思う。腹に響く和太鼓、突き抜けるような女性民謡歌手の大コーラス、特注オルゴールのおどろおどろしい音、どれもが絶品。DCS-W3 の実力を知った思いがする。とあるショップで、これよりはるかに大型のスピーカーで試聴させてもらったことがあるが、絶対に引けを取らないと思う。

* 伊藤君子「River of Crystals」「Follow Me」（「Innocence O.S.T.」収録）

- ・概要とポイント：「傀儡謡-陽炎は黄泉に待たむと」が一転して「Follow Me」に入ると、胸を締め付けられるような思いにさせられる。このアルバムの構成の妙としかいいようがない。
- ・インプレッション：こちらは逆に小音量のベスト・バランス・ポイントでしっかりと聞きたい。むしろ、音量を上げてまったく問題はない。あくまでも気持ちの問題である。それにしても日本のアニメって……。

* BLOOD+ Complete Best から、元ちとせ「語り継ぐこと」、「BLOOD+ Grand Theme」「Diva」

- ・概要とポイント：これもアニメのオリジナル・サウンド・トラック。ところが、劇場版ではなく、TV の連続アニメにもかかわらず、後二曲はハンス・ジマー／マーク・マンシーナというハリウッド映画のスタッフを起用するという贅沢さ。最近、ニュース番組やワイドショーあたりでもバックに流れることが多いが、とにかく後二曲を頂点として半端ではない。実際、ウィーンに行ったとき、投宿先のウィーンの森の中にあるユース・ホステルの庭でひなたぼっこしながら、試しにヘッドフォン・ステレオで聴いてみたら、場所のせいもあってか、これからグランド・オペラでも始まるかと錯覚したほどだった。
- ・インプレッション：元ちとせといえば「百年に一度の美声」とも言われる見事な歌声だが、そうい

った人の声はどうかすると張り上げ気味に鳴らしてしまうシステムがある。まだエージングが十分でないせいか、大音量時にはややその傾向がないでもないが、小音量時のベスト・バランス・ポイントでは見事なものである。「BLOOD+ Grand Theme」はというと、これはやはり大音量に限る。なんといっても曲自体のダイナミック・レンジが広いから、さすがにベスト・バランス・ポイントとはいっても小音量では物足りない。一方、「Diva」は物語終盤のキーワードであり、かつ実際にアリアを思わせる曲だが、これもダイナミック・レンジが広く、小音量ではやはりちょっと厳しい。しかし、ある程度以上音量を上げてやると、思わず「ブラボー」と叫びたくなる。

一方、あまりに有名なアニメでも、何らかの問題を抱えていた音源に対しては、きちんきちんと教えてくれる律義なスピーカーでもあります。

* 高橋洋子「残酷な天使のテーゼ(Directors Edit Version)」(「NEON GENESIS EVANGELION DECADE」収録)

- ・概要とポイント：ご存じ「新世紀エヴァンゲリオン」の主題歌。ただ、この曲の二メロ・三メロは案外知られていない。ところが、この曲が本当に胸にずきりと突き刺さるのは二メロ・三メロで、むしろそこではアップテンポながら包み込むような歌唱と同時に、強い意志を表現する歌唱が要求される。
- ・インプレッション：これは大音量でも小音量でも楽しめる。ただ、どうも高橋洋子の声質はこのスピーカーと相性が良くない感じがする。特に大音量時には声を張り上げすぎる印象がある。むろん、水準以上ではあると思うのだが……。

*高橋洋子「夜明け生まれ来る少女」「You are the One!」(シングル・ヴァージョン)

- ・概要とポイント：オペラ歌手を目指していた、というだけあって、なかなかのベル・カントである。聞き所はB面(CDシングルだと変だけど)収録の「You are the One!」で、ヴァイオリン・ソロをクラシック畑の仲一乃が担当している。「夜明け生まれ来る少女」は、アニメ「灼眼のシャナ」エンド・タイトルだったが、最近のアニメやゲームでは、クラシック畑の起用が実に多い。ただ、残念なことにこのシングル、録音があまりよくない。オーバーレベル気味で、明らかにサチっているところがあり、全体に歪みっぽい。
- ・インプレッション：なにしろ仲一乃のヴァイオリン・ソロ、これが強烈でヴォーカルとの絡まり合いは下手な鳴り方をするシステムだと、ものの見事に「おだんご」どころか「ごちゃまぜ」になって、ノイズだらけという感じになってしまう。もともとの録音に問題があるのだから仕方がないが、DCS-W3ではなんとか破綻せずに持ちこたえてくれた。ただし、あまり大音量にはできないが、これはスピーカーのせいではない。

この曲は本当に残念な録音なんですよ。マイナーなアニメですが、このアニメ、実に丁寧な仕事が出来てあって、背後の空気感をしっかり作り込んであるのに感動したことを覚えています。それだけに、せっかくのこのヴォーカルとヴァイオリン・ソロをきちんとイカして欲しかった、とかえすがえすも残念です。

もう一つ気がついたことに、このスピーカー、曲の行間の表現力に優れている、という美点があります。別の現れ方としては、楽曲が始まる寸前が静かで、たとえていえば漆黒の闇の中からおもむろに、しかし遅くなりすぎずに音が出始めるという特徴を感じています。ここの表現力が乏しいシステムはハイエンドと呼ばれる機器にも結構あり、私にはなんだかざわざわして落ち着かない印象を与えます。そういったシステムは音楽の生き活きとした表情に乏しいばかりか、どうかすると聴き疲れの原因にもなるので身近に置いておきたくないものです。やっぱり音楽は「音」が「楽」しくなくっちゃ……。

その一例です。

* さだまさし「セロ弾きのゴーシュ」(アルバム「風見鶏」収録)

- ・概要とポイント：乾いた弦の音がほしかった、ということでロス・アンジェルズで収録されたアルバムだけに、ややハイ上がりの録音。ところが、この曲はサン・サーンス「白鳥」をモチーフとしているうえ、言葉遣いが悲しいほどに美しい曲だから、大切に大切に鳴らしてやりたいもの。

- ・インプレッション：大音量になったところで、例の「さ」行がちょっと気になった。もともとの録音が少し乾きすぎ・ハイ上がりだということが拍車をかけているのかもしれない。しかし、小音量のベスト・バランス・ポイントでは実に見事。チェロの響きもさだまさしの声も、バックのストリングスもきれいにまとまっている（さだまさしの曲で一番好きな曲がこれです）。

* さだまさし「交響楽～シンフォニー」（ライブ・アルバム「随想録～エッセイ」収録）

- ・概要とポイント：たしか、これは新日本フィルハーモニーをバックに収録されたものだったはず。したがって、グレープ時代の曲ながらアレンジも違う。冒頭のヴァイオリン・ソロはもちろんさだまさし本人。ちなみに、私がモーツァルトの最後の器楽曲「クラリネット協奏曲イ長調」とこの曲を無性に聞きたくなるのは、ひどく寂しいとき。
- ・インプレッション：1980年のライブだが、小音量でも大音量でも大丈夫。ただ、さだまさしの曲に共通する点として「さ」行と「ち」「つ」のざらつきが気になる。その一方、オーケストラのチューニングから序奏、そしてさだまさし本人によるヴァイオリン
- ・ソロへの受け渡しは本当に悲しくなるくらい見事。もう一つ、この曲は行間の空気感が特に大切だが、そっと手にくるんで胸に抱きとめておきたいような気持ちにさせられる鳴り方をしてくれる。

現在は知りませんが、さだまさしさんはダイヤトーン・ユーザーだったそうです。そのうえ、乾いた弦の音がほしいということでロス・アンジェルズで録音する、というのは少々意外の感もありますが、どこかで「なるほど」と思わせるつながりに納得したものでした。

6. お別れ

さて、暑い最中、さらに熱い夏を経験した1週間あまりはあっという間に過ぎ、お別れの時が来ました。

私の耳が「慣れ」て気にならなくなったのではなく、「サ」行の荒れが徐々に緩やかになりつつ、録音その他に問題のありそうな音源の場合、そのことをさりげなく「荒れ」という形で教えてくれるようになったことを実感していました。音楽性という便利な言葉でカバーするわけではなく、高忠実度や高分解能を律義に守りつつ、音楽のエッセンスを楽しめる素質を確かに感じていただけに、このまま鳴らし続けたい、そのまま「買います」と意思表示したくてたまらなかつたのですが、実はそれから3か月の間に3回もの中国出張、しかも1度は3週間以上という長期出張をも含む、という事情があって、注文を猶予させていただきました（御寛容と御厚意に感謝）。

再び梱包してお返しするときは本当に名残惜しくて仕方ありませんでした。願わくば再びあいまみえんことを、そう祈りつつ、熱い夏が終わった虚脱感を抱いていました。

7. 私の好み

ここまでお付き合いいただいた方には、もう私の好みはある程度御理解いただけたことと思います。真空管アンプを使っているからといって、「柔らかく温かみのある音」（悪くいえば、輪郭があいまいで解像度の甘いところを雰囲気でごまかしている）を求めているわけでもなく、だからといって「徹底的に物性と特性を追求する原音再生派」（悪くいえば、音楽ではなく音を出すだけ）を求めているわけでもなく、あくまでもニュートラルで押しつけがましくなく、しかし輪郭とパースペクティブがしっかりと明確な音、ということになりましょうか。したがって、ホーン・スピーカーはどうも苦手です。特に、それこそ代表おっしゃるところの「ツイーターがついてー」的な大半のトゥイーターは、まず NG。耳が痛くなってきます。時折頼まれてやってきた PA の仕事でも、私がセッティングすると、「マイクがオフになって初めて PA やってたんだ、とわかる」ことを理想としています——まあ、たいていは後で他の人が過大音量にして、またまた補正やらされるのが常ですけども。

そういった訳で、DCS-W3 はまさに私のツボ、さりとして仕事を抱えた身ではすぐにというわけにいかず、後ろ髪引かれるような思いでそれから2か月あまりを過ごすことになりました。

仕事が無事終わって一息ついて、さて、と置いていたら、やっぱり DCS-W3 が気になります。たしか、真空管オーディオフェアが終わった頃でしたか、さて受注していただけるのかな、と思っておそるおそる

問い合わせてみますと大丈夫との御回答。とはいっても値の張るものでもあれば、Celestion は健在でしっかり良い音を出しています。迷っていたときに妻が「あのスピーカーも 20 年以上一緒に過ごしてきたんだし、ここで気分一新というのも悪くないんじゃない？」とありがたい御言葉。そこで発注することになりました。

どれくらい待ちましたっけ……確か届いたのが 12 月に入ろうかという頃でしたか。実は Celestion をめぐるちょっとしたハプニングがあって、これまた記憶が定かではありませんが、どうもそのハプニング、長年のスピーカーが「出て行きたくない」と拗ねたような気がしたのと、居間で使っていた JBL TLX-120（ユニットはフランス製、システム全体はデンマーク製という珍しい品物でしたが、廉価品です。でも中を覗いたら基本を押さえた仕事が出来たのは、さすが、と思ったものです）のエッジが崩壊、張り替えやユニット交換も考えたのですが、コスト・パフォーマンスに問題ありとしか言いようがなく、Celestion を居間に起用して活躍してもらうことにして、GO サインを出しました。

8. 到着、そして本格セッティング

こうやって、念願叶って DCS-W3 と再びあいまみえることができました。うれしかったことうれしかったこと。今度は本格的なセッティングの開始です。

基本的な設置箇所は最初のままです（というより、選択の余地がない）。ただし、いくつか問題点がありました。

1. TAOC のスピーカースタンドは頑丈で信頼に足る製品ですが、そのままでは DCS-W3 には少し低すぎます。買い替えるのももったいないことですから、そのまま流用するとして、少し高さを稼ぐ必要があります。その対策として、別件で買ったもののデッドストックになっていた TG メタルの鉛鉛板がちょうど 8 枚ありました。これをスパイク・ベースの下に置いて、2cm ほど高さを稼ぎました。

2. しかし、それでも理想とされる高さ、すなわちトゥイーターを耳の高さに、というところにはまだ低い状態です。この対策として、前面を持ち上げてやって、ユニットが発生する音波の中心軸を斜め上方に向けて、リスニング・ポイントに到達する方法を採ることにしました。ニア・フィールド・スピーカーやモニター・スピーカーなどで同様の手法を使うのと同じ、と考えたわけです。

その際、インシュレータの効能は<その 1>「失敗」でふれたとおり、よく理解していましたが、できるだけこれを活かすこと、それから支点を明確にするため、別途スパイクとスパイク・ベースを準備して角度を調整することになりました。いろいろ試したのですが、現在はエンクロージャ前面から約 5cm 弱ほどの中心軸に支点を定めて斜め上方にあおっています。

前二つのインシュレータが殺されることになってしまうのですが、試聴を繰り返した結果、利害得失を総合するとこの方が好ましい、と判断して現在はそのままにしています。

3. さらに問題点として考えられるのは左右の条件が違うことです。サイドと背後の壁からは一応離してありますが、特に左サイドはいくら二重にカーテンが引いてあるとはいえ大きなガラス窓を控えていますし、右サイドにもクロゼットの扉などがあります。

この影響を回避するために二つの方法を採りました。一つは、システム全体を少し内向きに振ること。あまり内向きに振ると広がり感に欠けることとなりますから、おおよそ 15° から 20° というところでしょうか。その際、スピーカースタンドの上面が広めだったのはむしろ幸いでした。

もう一つは、手元に静音 PC 用の吸音・防音マットがありましたので、左サイドにはこれを解体した段ボールの両面に貼ってガラス窓によりかからせ、右サイドは扉そのものに貼り付けて対策しました。

どうやらこれで、特にガラス窓の影響は回避できたように思います。

9. 理想の音をめざして

さて、DCS-W3 の凄いところは、先にふれた「基本の『き』」を押さえただけの「かんたんセッティング」でも素姓の良さを十分楽しむことができながら、追い込んでいくとどんどんその素姓の良さが生き活きと発揮されてくる、というところでしょうか。したがって、贅沢な使い方ですが、ちょうどキュリア・スピーカーのように PC サイドのデスクトップスピーカーとして使っても、とっても幸せになれると思います。しかし、その一方で、いろいろ考えて、いわゆる「ピュア・オーディオ」的に使おうとすれば、存

分にその試みに応えてくれる、という楽しみもあります。

私が理想にしたのは、DCS-W3の「音」の良さだけではなく、空間再現力の良さをできるだけ引き出したい、ということでした。具体的にいえば、スピーカーユニット中心を結ぶ線上の真ん中から1mほど上の空間の一点を中心に発音エリアが存在し、そこを中心として音が放射され、音源に記録された音場情報が適切に再現される、その際、むやみやたらに広大な空間にばらばらな音が出てくるのをおもしろがるのではなく、あくまでも仮想的な発音の中心から自然にシステム外側まで音場が広がる、という状態を理想として調整を始めました。

その際、「神様」として準備したのは次の3つのソフトです。

1. **Yumi Arai The Concert with old Friends** : これは代表も「神様」としてお使いだとのことで、制作者の意図をつかむために大切だと思って入手しました。幸い、レンタル落ちながら状態の良いCDが格安で入手できました。何よりもうれしいのは、ラストで荒井由実が感極まって歌うところに感動できることです。しつこいですが、「やっぱり音楽は『音』を『楽』しまなくっちゃ」。

2. **ウィーン・ニューイヤーコンサート 2002** : クラシックでは異例の売り上げを記録した、小澤征爾指揮するウィーン・ニューイヤーコンサートの記録です。BS生中継をHiFiビデオで録画したものをデジタル化して保存していますので、これをPC経由で使用しました。

実は、クラシックを聴き始めて30年、念願だったウィーン・楽友協会大ホールに2007年3月、ついに訪問することが叶いました。当日のプログラムは残念ながらウィーン・フィルハーモニーではありませんでしたが、アルノクールさんのモーツァルト・プログラムでした。そのときの印象は、アンサンブルとコーラスから発せられた音は一度ふわりと舞い上がって、高い天井から身体中に降り注ぎ、次の瞬間に黄金色の輝きを発しながら消えていく、どこから誰が何の楽器をなどという次元ではなく、豊潤な音楽の奔流が会場全体を思うがままに充たし、身体全体を包み込む幸福感でした。そのときは「もう思い残すことはない」とさえ思ったものです。

小澤征爾のニューイヤーコンサートについては、「まるで鋼鉄の機関車が奏でるワルツ」という辛口のコメントもあったようですが、格調の高さと楽友協会大ホールの素晴らしさを味わうには十分ですから、一も二もなくこれを選択しました。

3. **エヴァンゲリオン新劇場版・序** : 「え〜」という声が聞こえそうですが、DVD化にあたって劇場公開の「1.00」から「1.01」に変更されていることからわかるように、家庭での5.1ch dolby-digitsl dts再生を前提としたリミックスが施されています。総監督・庵野秀明氏は御自宅でサラウンドを満喫されていることは有名だそうで、庵野邸で庵野監督が聴く環境を再現することを目的としているそうですから、2chでどこまで迫ることができるかおもしろい、と思ったからです。それに、この映画の演出では声が重なり合う場面が効果的に使われていますので、なおさら目的を達成するのに好都合です。なお、ダウンミックスは自分で工夫して作ったものです。

: ところで、庵野秀明氏のサラウンドシステムですが、スピーカーはレイ・オーディオじゃないかと思うんですけど、どなたかご存じないでしょうか？

というのは、「エヴァ」といえば「綾波レイ」、それにレイ・オーディオの本社所在地はなんと「神奈川県足柄下郡箱根町仙石原」、知る人ぞ知る「第三新東京市」じゃあないですか！

さて、リスニング・ポイントからの距離、左右のスピーカー位置を合わせたのですが、それだけではまだまだ理想とは距離があります。

人間の耳とはこわいもので、スピーカー位置の前後のズレを左右の違いとして感じ取ってみたり、上下感の不足として感じ取ってみたり、その結果として音場に過不足を感じたりとさまざまな現象が起きます。これらに面食らったり一喜一憂したり、これも楽しみの一つではあるのですが、途方に暮れることも一再ならずありました。おまけに耳の状態もけっして一様ではなく、聴いているうちにだんだんわけがわからなくなって、しばらくして聴いてみると愕然、ということも一度や二度ではありませんでした。ただ、幸いなことに、これまである程度の経験があって、自分の中に「出したい音」のイメージをある程度具体的に持てたこと、なんととっても試聴を通じて、代表の適切なアドバイスもあってDCS-W3の素性を把握できたことが大きくプラスとして作用しました。ですから、いったん「出したい音」への方向性が見えてきたら、そっちへ向けてスピーカー・セッティングを詰めていけました。ただし、最終的な微調整は、ほんと、mm単位での調整でした。

失敗

さてさてお約束の失敗です。

先にふれたとおり、私のリスニング環境は仕事場兼用のため、書類の山に囲まれています。これが結構な悪さをしてくれたのですね。

具体的に申し上げますと、mm 単位の調整に入ったところでどうしても気になったのは、右サイドへの音場の伸びの悪さでした。左サイドに比べて明らかに伸びが悪く、右サイドでは発音がばらける感じに違和感を拭えないでいました。むろん、この段階でかなりの水準だったことは間違いありません。だけど…、というわけです。

ここでねらいをつけたのは、右サイドの書類群。まあ、それほど量の量でもないし、と思っていたのですが、少しばかり高さがあって、右側ユニットを少し隠すような具合になっていました。スピーカー・システムの高さを稼ぐ必要性やユニットの中心軸を斜め上方にあおったのは、これを回避することも目的としていました。結果から言えば、これだけでは不十分で、書類の山を片付けることでカタがついた、というお粗末なお話です。

できることならば、仕事をぜ～んぶ放棄して、書類の山もぜ～んぶ廃棄して悠々自適の生活の中で、それこそカタログ写真にあるような空間にしつらえ直して DCS-W3 を楽しむことができれば一番ですが、これは無理というものです。しかし、やっぱり片付けは必要、と大いに反省した次第です。

もう一つ、失敗かどうかよくわからない話ですが、隣室は娘の部屋です。自宅は比較的防音性に優れており、これまで夜中でも隣に漏れるということはまずなかった、と思います。ところが、すでに2度、「うるさくて寝られん」という「苦情」が隣室から舞い込みました。結構音量を絞っていたのですが、行ってみると音が良く通るのですね、これが。いわゆる「鳴り飛ばす」という感じとは全然逆のスピーカーなのですが、音の浸透力は結構高いようです。カーオーディオに使ってみたい、とおっしゃる方の印象がよく理解できますし、条件が許せば、上質の PA としても「あり」かなと思います。

10. 今後の課題

こういった試行錯誤の末、「神様」と定めたソフトが理想の音を再現したときには、本当に涙が出るほどうれしくなって誰彼かまわず話したくて仕方がない状態でした。

ちなみに、息子を引っ張ってきて「エヴァンゲリオン新劇場版・序」を一緒に鑑賞したときの顔と言ったら、もうしてやったりというかなんというか。御覧になった方はおわかりのとおり、クライマックスの「YASHIMA 作戦」では、歴大な人員と物量を動員する際の種々の指令が次々に飛び交う「動」のシーンと、「14 年前に運命を定められた子どもたち」の過酷極まりない運命を暗示するように風が吹き抜ける中でモノログが続く「静」のシーンが巧みに交錯しています。

前者の再現では、ある指令はまるで通り向かいのお宅の車庫あたりから聞こえるかと思えば、センター左下から応答が返ってくる、という状態に驚くばかりでした。逆に後者では、会話そのものもさることながら、吹き抜ける風の音に胸の内をえぐられるようで切ない、ともらしていました。「やった～」という気持ちです。

こうしてセッティングが完了して2か月ばかり、面倒な仕事の追い打ちに辟易して、しばらく遠ざかっていることもありましたが、そういったもろもろをやっつけたら少し休んではいそいと DCS-W3 と楽しいひとときを過ごしています。それに、ウッドコーンとフェイズプラグの色調は光のあて方や光源の種類でさまざまな表情を見せ、ピアノ塗装とあいまって見飽きることがありません。ついこの間、ちょっと光の向きと見る位置が変わったら、このちっちゃなスピーカーが誇り高く孤高の姿を見せているようで、愛おしくてたまりませんでした。

現時点で本当に満足していますが、でもやはり気になるのがサラウンドという存在です。たしかに発音

中心を自分の理想とする位置にもってけることができましたが、あくまでも仮想の存在であることには相違ありません。このところブログで代表が強調なさっている「センタースピーカーの重要性」というものが、自分の中で徐々にクローズアップされてきていますが、もうしばらく時間的・財政的猶予が必要なようです。

その一方、DCS-W3 を見ていると、ふと「究極のミニマリズム」という言葉が浮かんできました。たしかに LX-360 は優れたアンプですが、いかんせん真空管という「大飯食らい」を抱え、夏ともなると暑さに困る、という難点を抱えるばかりではなく、「エコロジー」という観点からはあまり誉められたものではありません。

とするならば、むしろ DCS-W3 の耐入力に見合った適切な出力をもつ高効率・高品質のデジタルアンプがあれば、こちらに集約してエコロジカルなミニマリズムを実現して、社会的にも歓迎され、心から音楽を楽しめる環境を作る、という正反対の方向もないではありません。

どうもデジタルアンプは「発展途上」というだけでなく、オーディオファイルの間では少々継子扱いされているきらいもなくはないのですが、逆に可能性に充ちているという気がします。いずれにしてもいろいろな意味で限られた資源をやりくりして、その中で心豊かな「音」の世界を楽しんでいきたい、と考えています。

1 1. 番外編 <スーパー・トゥイーター追加編>

なぜ？

フルレンジ一発のシステムなら、その美点を究めるべきではないか、というご意見はもっともだと思います。ただ、今私が魅力を感じているスーパー・トゥイーターというのは、ちょっと別の経緯で出会った存在です。

これまた例のショップに「何かおもしろいものはないかな」と遊びに出かけたとき、店員さんが「おもしろいモノがありますよ」と差し出したのが、TakeT BATPRO でした。「え～、スーパー・トゥイーターですかあ？」と言う私に、「これはちょっと違いますよ。ただここではまずわからないと思いますから、お宅で聴いてみるといいですよ。軽くて扱いも簡単だし、2, 3日お貸ししますよ」——というわけで、DCS-W3 よりも前に入手したものでした。

で——借りたっきり、ショップに帰る日が来なかったことはご想像のとおりです。理論的には 300kHz 再生が可能、しかしマイクの性能限界で 180kHz まで再生可能、という話は最初とうてい信じられませんでした。だいたい、6,000Hz 以上はアテにならない耳の持ち主では「猫に小判」というものだろう——ところが、つないで驚きました。当然のことながら TakeT BATPRO に耳を押し付けても何も聞こえません。しかし、いつも聞き慣れた室内楽の CD、木管そして弦の音に艶やかさが増し、実に幸せな気分になれるのです。

SACD 登場の頃、可聴帯域を超える超高音が α 波を誘発して心地よくなれる、という話を聞いて、正直なところ、「どうせまた著作権保護のシステムでユーザーをがちがちに囲い込むための擬似科学的なリクツだろう。そんなに超高音が必要なら、ラインコンタクト針を使ったカートリッジ (=CD-4 時代、音が悪いことで有名でしたね) でアナログディスクにでも戻ればいいじゃないか」などと思っていたものです。

こんな話は親しい人の中でしかしませんでした。その後、SACD 対応を銘打つシステムが出てきても、それは「余裕分」くらいにしか思っていなかったため、ほとんど無視を決め込んでいました。ところが、よくよく見ると PARC Audio の Web にもスーパー・トゥイーターが紹介されています。これはどうも様子が違う……。

上司への紹介

私の上司は学生時代にオーケストラに所属し、今も趣味としてオーボエを嗜み、自宅には本格的な防音仕様の音楽鑑賞室を持っています。ご招待を受けて訪問したことがあります。音ではなく本当の音楽好きで、仕事を離れてこうした四方山話をするのがお互い楽しくてなりません。

それでまずはこの方のご意見をうかがってみよう、ということでお話ししました。ま、軽い話題、というくらいです。

ところが驚いたことに 10 日ばかり後、廊下で呼び止められるやいきなり「私も買いましたよ、TakeT。驚きました。今使っているスピーカーに渡り線でつなぐだけで、私の好きなオーボエをあんなに美しく鳴らしてくれるなんて、初めての経験で興奮しました」と言うのです。

その時はたしか同僚が一人近くにおいて、「それはまたディープな話で」とにやにやしていたのですが、上司が真顔で「いやいや、取り付けはとても簡単、しかもものものしくなくて嫌な音は、というよりもそれ自身は全然音が出ないのに今使っているスピーカーの音が艶やかになって、聞き慣れたレコードがこんな演奏だったのかと発見することだらけで」と言い出したのには、同僚はもちろんのこと、私も驚きました。

スーパー・トゥイーターだから高音、とっていたら大間違い、なぜ中低域が充実するんでしょうねえ、不思議ですねえ、今も折に触れてその話題に花が咲いています。

世間では、専門家を含めて、この種の製品に対しては賛否両論相半ばするようです。実際、α波うんぬんの話は、まず疑ってかかった方が無難、ということもあって、あまり信用していません。しかし、現に良い音で幸せを感じることができているわけですから、決して「無駄遣い」ではなかったと思います。

DCS-W3 とのセッティング

そこで、DCS-W3 導入にあたって、TakeT BATPRO の追加は前提として考えていました。先にふれたセッティングの詰めが終わり、違和感なく満足できる水準に達した、と確認してから追加してみました。

ところが、ここでお約束の失敗です。(^^ゞ

両方の位置を揃えてエンクロージャ上に並べてみたら、確かに Celestion 同様、さらに艶やかさに磨きがかかります。しかし、音場が何か変……おかしいなあ、やっぱり左右で空間の具合が違うのかなあ、と位置を調整してみたのですが、どうにも違和感がつきまとって離れません。結局、その日は止めにして休みました。

その後数日、仕事に追われてスピーカーどころではなかったため放っておいたのですが、ふと「まさか」と思い当たるフシがありました。というのは、BATPRO にはメイン・スピーカーとレベル合わせをするためのアッテネータが背面についています。また、底面にはローカット特性を切り替えるスイッチがあります。このどちらか、あるいは両方が違っているのではないか……実は、以前にも底面のローカット特性が左右で違って、音場に違和感が残ったことがありましたが、そのときよりも違和感の具合が強かったため、レベル調整をチェックしたら……やっぱりそうでした。左右で 10dB 違っていました。

アッテネータがあつてねー。お粗末様でした。(^^ゞ

それにしても、存在を主張しないのに、なくなったら気がつく。万人に受け入れられるのは、なかなか難しい存在だと思います。実際、PARC Audio に紹介されているスーパー・トゥイーターは代表の渾身の作品と承っていますが、お値段から見て、とうていわが家に一つ、というわけにはいきません。そこへいくと、とりあえず BATPRO ならば手が届く——もちろん、一方は高分子フィルムのハイル・ドライバ、一方は究極の極薄アルミという違いがあり、磁気回路も違うのですが、共通点はどちらも「ツイーターがついた」という一般の製品とは明確に一線を画している、というところでしょうか。しかも、キンキン・カンカンという音ではなく、音楽を楽しむのに必須というべき人の声や弦の音、そして気配が上品になる、という点、とても好ましいと思います。

願わくば、代表の思想が手の届く価格で手に入るならば——無理なお願いでしょうか。一般に受け入れられることの微妙な製品になるとは思いますが。

さて、レベル合わせを改めてみると、それまでの違和感が拭い去られていました。ただ、ほんの少し、どこかが違う。うまくいえないのですが、そんな感じがまだ残っていました。

それからしばらくたって、どこかでウィルソン・オーディオという名前を聞いて、「へえ、いろんなものがあるもんだ」と思って値段を見て目玉が飛び出し……なにしろ、1,000万円を超えるっていうんですからねえ——その最高峰・System 7の「能書き」を読んでいて、はっと思い当たる場所がありました。いわく「三次元的に位相を管理する独創的なシステムとして……」

よくよく見ると、大振りなエンクロージャの低音部と高音部はなるほどまっすぐに並んでいるわけではないようです。微妙に位置調整も可能なようで——さて、20kHzで音の波長はどれくらいの長さだったっけ？ 計算してみると、どう考えても2cmを超えない、となるとスーパー・トゥイーターの担当領域では……これはたいへん、と思ったものでした。

そこでいろいろ工夫してみました。試行錯誤の末、私の環境で最適の結果は、スーパー・トゥイーターの後ろを数mm上げて、DCS-W3よりもほんのわずかに(10°以下)内向きに振ってやったときにベスト、と判断しました。

今もこうしてセッティングを確定したDCS-W3で音楽を聴きながら書いていますが、本当に良い音です。書き物の邪魔にならず、時折休憩かたがたパソコンを閉じてスピーカーに向き合うと、実に高忠実度・高分解能と高音場再生力をもって迫ってくることに心躍ります。

結構大きな出費でしたけれども、本当に素敵なスピーカーをどうもありがとうございました。